女性の実態調査から
～2008年調査をもとに～

セーフティネットを存分に活かすために
和歌山市男女共生出前講座

和歌山市男女共生出前講座が3月8日、杭ノ瀬文化会館でひらかれ、42人が参加した。

講師の話を真剣に聞く参加者たち

講師は部落女性の実態調査やひとり親家庭の実態調査にかかわったの神原文子・神戸学院大学現代社会学部現代社会学科教授で「実態調査による部落女性と差別」について講演された。

部落女性の早婚と学歴との関係について、部落女性の大学進学率が低く、一般女性と比べ平均3歳若くして結婚していることが調査のデータから明らかとなっていることが語られた。部落出身の女性は地域がセーフティネットとなっており、住宅や仕事、相談相手がある。あらゆる差別の撤廃は解放運動のような活動が重要だと語られた。

講演終了後、神原先生と女性対策部が女性の実態調査について目的や調査項目の決め方などについて話しあった。

子どもの最善をともに考える
和歌山市子ども・子育て会議

和歌山市子ども・子育て会議を2月15日、市役所大会議室でひらかれ、子育てにかかわる医師や保護者など15人が参加した。

会議は「幼保連携型認定こども園の認可について」「特定教育・保育施設の利用定員について」「和歌山市子ども・子育て支援事業計画の進捗状況について」の3つの議題について議論した。なかでも「和歌山市子ども・子育て支援事業進捗状況について」では、性同一性障害について、小児科の夜間救急診療について、待機児童について、延長保育について、保育士不足について、障害者差別解消法について、国際理解教育について、学童についてなど、活発な意見がだされた。なかでも「学校における性教育について」100％の実績があがっているが、性同一性障害の子どもや保護者への配慮等についてすべての学校ではとりくみがすすんでいない、和歌山市が保育士不足について、県の施策にのっかるかたちで施策をすすめようとする消極的な姿勢に憤懣する声もあがった。市がどのようにがんばるかを念頭におきたいとしめくくった。

主張
先人の遺志をうけつぎ、全同盟員が一丸となって前進しよう！

1

3月2日から3日、東京で部落解放同盟第73回全国大会がひらかれた。全国から695人の代議員が参加し、熱心な討論がされた。大会には来賓として自由民主党、民主党、公明党をはじめ各政党の代表者、そして、労働組合を代表して連合、宗教界、企業とまさに各界各層の来賓があいさつした。中央本部を代表して組坂繁之・中央執行委員長は、今なお差別の実態は厳しいものがある。インターネットを使った差別メールや部落地名総鑑の復刻版を販売しようとする事件等がある。この全国大会を機に全国で法制定をはじめ三大闘争を推進していこうと訴え、西島藤彦・中央書記長から運動方針案が提起された。そのなかには、昨年私たちがとりくんできた人権フォーラム和歌山県東京集会のとりくみや成果が紹介された。和歌山県連からも藤本哲史・執行委員長をはじめ42人の代議員が参加し、全体集会のあと3つの分散会にわかれて参加した。

各分散会では各県でとりくまれている活動の報告や運動方針を補完する意見がだされ、県連からも活動報告や昨年全国的にとりくまれてきた水平社宣言をはじめ関係書類のユネスコ「世界記憶遺産」の活動にかかわって、和歌山県紀の川市にある西光万吉氏の居宅を修復・保存する『西光万吉顕彰会』の募金活動のお礼が報告された。

2

先日、和歌山県議会で組織内候補・ふじ本まり子特別執行委員が質問に立った。教育関係、障害者差別解消法、そして和歌山県人権尊重の社会づくり条例に関わって質問がだされた。県内でも悪質な差別事件や差別問合せ事件が多発している。そして、悪質な差別図書『部落地名総鑑』の復刻版ともいえる出版物がインターネットで販売されようとしている。現行の法体制ではなんらの対処すらできないことや県人権条例をさらに具体化していく必要があると訴えた。県当局の回答は条例を具体化させることは現段階として難しい問題があるが、国に対して人権フォーラム東京集会の成果と意義をふまえて引きつづきさまざまな機会をとらえて訴えていくという答弁がなされた。

3

前・中澤敏浩県連執行委員長が死去され1年半が経過する。前・中澤委員長の部落解放運動に残した功績は大きいといえる。二階俊博代議士をはじめとする県選出国会議員のとりくみにより、自由民主党政調会のなかに「部落問題に関する小委員会」が設置された。いま、与党内で部落差別をなくしていく議論がはじまっている。私たちも前・中澤委員長の遺志をうけつぎ、現・藤本委員長を先頭に執行部、全同盟員が一丸となり人権の法制度実現と三大闘争勝利に向けたとりくみを前進させていかなければならない。

人間、西光万吉を偲び
西光万吉しのぶ会

西光万吉先生をしのぶ会が3月21日、井阪文化会館でひらかれ、各方面から67人が集まり、西光の足跡と人となりを偲んだ。

はじめに、主催者を代表して加藤昌彦・代表理事からあいさつがあり、立具久幸・紀の川市市長代理市民部審議監はじめ6人の来賓をむかえはじまった。

はじめに、6人の女性（※1）から「水平社が生まれるまで」―青竹の荊冠旗―と題して朗読が披露された。つぎに「人の世に熱あれ！私と部落とハンセン病」と題し林力・元全同教副委員長から、少年のころ、目の前に部落があったこと、教師としてムラの小学校に赴任したことなど、そのほか多くの転機をむかえ今に至ることが語られた。

今年で30回をかぞえ、没後46年を迎える偲ぶ会は、今年大きな節目をむかえる。昨年からとりくみをすすめてきた「西光万吉居宅遺品保存と住居改修」運動の経過と今後のとりくみが報告され、今年6月末には資料館がオープンする予定。

（※1）
◆朗読者
飯田信子、飯田恵子、吉本信子、宮本睦、山本昌代、矢野治世美

朗読をひろうするようす

文化の窓
「差別の視線」
― 近代日本の意識構造 ―

著者：ひろたまさき、吉川弘文館、ISBN4-642-07753-7

国民国家と差別を近代の相対化をめざす全体史の試みとして出版された一冊。「近年の歴史学の衰弱は否定しうべくもないが、その原因には、「近代」の呪縛からいまだ解放されていないことと、全体史への視野の喪失とがあると私は考えている」と記されるように、逆流しつづける日本の政治、ひいては歴史が物語っている。

◆お問い合わせは県連・教宣部まで
TEL 073－473－2301